

# 告げ人

伊藤左千夫

青空文庫



雨が落ちたり日影ひかげがもれたり、降ふるとも降ふらぬとも定めさだめのかぬ、晩ばん秋しゅうの空そらもようである。いつのまにか風は、ぼつたりなげて、人も氣きづかぬさまに、小こ雨さめは足あしのろく降りだした。

もうかれこれ四時す過ぎ五時ごにもなるか、しずかにおだやかな忌い森もり忌い森もりのおちこち、遠とくの人声にこ、ものの音ね、世よをへだてたるものの響ひびきにもにて、かすかにもやの底そこに聞きこえる。近くあからさまな男女おとこの話わし声こゑや子どもこどもの泣なき騒さわぐ声こゑ、のこぎりの音ねまき割わる音こゑなど、すべてがいかにまた、まのろくおぼろかな色いろをおんで聞きこえる。

ゆつたりとおちついたうちにも、村そん内ない戸こ々このけはいは、おのがじしものせわしきありさまに見える。あす二十二日にじふににちがこの村むらの鎮ちん守じゆ祭さい礼れいの日にちで、今こん夕ゆうはその宵よ祭まつりであるからであろう。

源げん四しろう郎ろうの家うちでは、屋やし敷敷の掃そう除じもあらかたかたづいたらしい。長なが屋や門もんのまえにある、せんだんの木きに二ふた、三さん羽ぼのシギが実みを食くいこぼしつつ、しきりにキイキイと鳴なく。その声こゑはもの考えする人の神しん經けいをなやましそうな声こゑであった。ほうきめのついでる根ね元もとの砂すな地ぢに、やや黄きばんだせんだんの実みが散ちり乱みだしてある。どういうものかこの光こう景けいは見る人ひとに

あわれな思いをおこさせた。

源四郎はなお屋敷のすみずみの木立ちのなか垣根のもとから、朽ち葉やほこりのたぐいをはきだしては、物置きのままなる栗の木のものでそれを燃やしている。雨になったのでいつそうせいてやつてるようすである。もとより湿けのある朽ち葉に、小雨ながら降つてるのだから、火足はすこしも立たない。ただプツプツとけむるばかり、煙は茅屋のまわりにただようている。源四郎はそれにもかかわらず、どしどしといやがうえにごみをのせかける。火はときどき思いだしたように、パチパチと燃えてはすぐ消えてしまう。朽ち葉のくさみを持った煙はいよいよ立ち迷うのである。源四郎は二十二、三の色黒い丸顔な男だ。豆しぼりの手ぬぐいをほおかむりにして、歌もうたわずただ黙もく掃除して

いる。

源四郎のしゅうとごは六十以上と見える。背高く顔の長いやさしそうな老人だ。いま奥の間の、一枚開いた障子のこかげに、机の上にそろばんをおいて、帳面を見ながら、パチパチと玉をはじいてる。お台屋のかたでは、源四郎の細君お政とママ母と若いやとい女との三人が、なにかまじめに話をしながら、ママ母ははすの皮をはぎ、お政と女はつと豆腐をこしらえてる。むろんあしたのごちそうを作つてるのである。

シギもいつしかせんだんを去つて、庭先の栗の木、柿の木に音のするほど雨も降りだした。にわかにならぬ暗くなつて、日も暮れそうである。めがねをはずして机を立つた老人は、

「源四郎……源四郎……雨がひどくなつたじゃねいか、もうやめにしたらどうだい」

「ハツ」

「源四郎や」

「ハツ」

源四郎は、ただハツハツと返事をしながら、なおせつせと掃除をやつてる。老人は表座敷のいろりばたに正座して、たばこをくゆらしながら門のほうを見る。おもぎし父にて、赤味がちなお政は、かいかいしきたすきすがたにでてきて、いろりに火を移す。鉄びんを自在にかける。

「どうもほん降りになりましたね、おとつさん」

「うむ、せつかくの祭りも雨だない。えいやい休みだから」

お政はそこをおりていったが、裏のほうからすぐ長女の七つになるのを連れてきた。

「おじいさん、どうぞ柿をむいてやつてください。もう暗くなつたからね、おじいさんの

そばにいるのだよ」

「おおまあや、この降るのにおまえどこに遊あそんでおった。さあおじいさんとこへきな。あしたあ祭りだからな、みんなのじやまになつちやいけねい。いまに甘酒あまぎけもできるぞ。うむ、柿かきのほうがいいか、よしよし」

松まつ女つじよはおじいの膝ひざにのつて柿かきを食くつてる。源四郎げんしろうもようやく掃除そうじをやめたらしい。くまでやほうきやくわなどを長屋ながやのすみへかたづけしている。そとは雨の降ふるのも見えぬほど暮くれてきた。そのほの暗ぐらい長屋門ながやもんをくぐつて、見知みしらぬ男おとこがふたりいそいそとはいつてくる。羽織はおりはもめんらしいが縞地しまじか無地むじかもわからぬ。ももひきぞうりばきのいでたち、ふたりは二十五、六ぐらい、によつたふうである。軒のきに近づくとふたりはひとしくかぶりものをとる。

「ごめんください」

「ごめんください」

「ハイ」

老ろう人じんは松女まつじよを膝ひざからおろしてちよつとむきなおる。はいつたふたりはおなじように老人えしやくに会あひした。老人はたつて敷しき物ものをふたりにすすめる。ふたりのものは腰こしもかけない

で、おまえが口上を申してくれ、いやおまえがと、小声に押し合ってる。老人はもとより気軽な人だから、

「おまえさんがたはどちらからでございますか」

「ハイ」

「ハイ」

ようやくのこと、すこし年上らしいほうの男が、顔のようすをつくろうて、あらたまつた口調に口上をのべる。

「わたくしどもは、その大富村からでましてございますが、ご親類の善右衛門さんのおぼさんが、けさそのなくなりましたものでございますから、告げ人にでましたしでございませう。ハイ一統からよろしくとのこと……」

「あ、さようでございましたか。それはそれは遠方のところをご苦労さまで……それはあのなくなつたは気違ひのことでしょうか」

「さようでございませう。善右衛門さんからよろしくと申しましてでございます」

「まことにはやご苦労さまに存じます。あの気違ひも長ながとご迷惑をかけましたが、それでわたしも安心いたしました。まずどうぞおかけくださいまし」

この老人は応対のうまいというのが評判の人であつたから、ふたりの使いがこの人にむかつての告げ人の口上はすこぶる大役であつた。ふたりは道すがら話もせず、腹のうちでねりにねつてきたのである。どうやら見苦しくもなくあいさつがすんだので、ふたりは重荷をおろしたようである。気色のほりもゆるみ、腰のほりもゆるんで、たばこ入れに手がでる。ようやく腰をかけて時候の話もでる。

平生多弁の老人はかえつて顔に不安沈鬱のくもりを宿し、あいさつもものういさまである。その気違いというのはこの老人の前妻なのだ。長女お政が十二のときにまつたくの精神病となつたのである。いろいろ療養をつくしたが、いかんともしようがなく、いささかの理由をもつて親里へ帰した。元来は帰すべきでないものを帰したのであるから、もと悪人ならぬ老人は長く良心の苦痛にせめられた。そのみならず気違いはその後、里に帰つても里にせず、こじきとなつて近村をふれ歩いた。たちがたき因縁につながる老人は、それがためまたあきらめてもあきらめられぬ羞恥の苦痛をおいつつあつたのである。このごろ老人もようやく忘れんとしつとありしをきようは耳新しく、その狂婦もなくなつたと告げられ、苦痛の記憶をことごとく胸先に呼びおこして、口にいうことのできないいやな心持ちに胸がとぎされたのである。



その凶報はおだやかなりし老人の胸を攪乱したばかりでなく、宵祭りを祝うべき平和な家庭をもかきにごした。

大富からの告げ人と聞いたお政は手のものを投げだしてきた。懇切に使いの人の労を感謝したうえに、こまごまと死者のうえについての話を聞こうとする。老人はお政がでたをさいわいに奥へはいったままでてこない。まま母もそれを聞いてちよつとあいさつにでたぎり寄りつかない。源四郎は馬小屋にわらなどいれている。

ひとりお政はたとえ気違いでもこじきでも、正しき生みの母である。あたたかき乳房に取りすがつて十二のときまで保育を受けた母である。心がけのよいかしこい女といわれているお政は、

「わたしはもうみえも外聞も考えませぬ。たとえあの気違いがどのようなふうをしていようと、気違いですものしかたがありません。どんなになつていても、わたしはただこの世に一日も長く生かしておきたいと思つぱかりであります。あの気違いの子がと人さまに笑われても、気違いの子にちがいないのですから、よんどころありません」

とお政が、ことにふれての母に対する述懐はいつでもきまつてるが、どうかすると、はじめは平気に笑いながら、気違いのうわさをいうてても、いつのまにか過敏に人のこと

ばなどを気にかけて、涙を目に一ぱいにしたかとみるまに、抱いてたわが子を邪険にかきのけて、おいおい声を立てて泣きだすようなことがあるのである。思いやりのないだれかれば、お政もすこしへんちきだ、子どものふたりもある女が大声たてて泣くのはあたりまえではないなどという。心あるしんせつな人らは氣違いになった母よりも、お政のほうがかえってかわいそうだと、とも涙にくれて同情を寄せてる。

お政は、きよう不意にその母がなくなつたと聞かせられたのである。あしたは祭礼の日というので朝から家じゆう総がかりで内外の取りかたづけやらふるまいの用意にたてきつてる際に、告げ人を受けたのである。お政はほとんど胸中が転倒している。まづなにごとよりもさきに、お政が胸に浮かぶのは、氣違いの母がどんなふうにしてなくなつたかという点である。

もしや野原か往來などで、行き倒れにでもなりやせまいか、人の知らぬまに死んでいたのでないかしら、それともすこしは早くようすがわかつて家のものの世話を受けてなくなつたのか、いろいろな想像が一時に胸にわきかえる。ひさしいあいだの氣違いであるから、家の人たちとてきつと満足には世話もしてくれなかつたろう。

とかくにこうひがんだ考えばかり思いだされ、顔はほてり、手足はふるえ、お政はやや

とりのぼせの気味で、使いのものに始終のことを問いつめるのである。告げ人というものにたいしてのあしらいかたには、通例の習慣がある。お政はそれらのことにも気がつかずに、たすきを手にして立ったまま話を聞いている。使いのふたりがかわりがわりに話すところをまとめると、こうである。

「べつに病気というほどにも見えなかつたけれど、この月はじまりのころから、たいへんおとなしくなつて、家のものいうことをよく聞きわけ、ほとんど外へでなかつた。家のひとたちのあてがうものをころよく食い飲みして、なんのこともなく昨夜まで過ぎしてきたところ、けさは何時になつても起きないから、はじめて不審をおこし、いろいろたずねてみるとようすがわるい、きゆうに医者にも見せたがまにあわなく、そのうちまもなく息を引き取つた。あなたにお知らせするまもなかつたは残念ながら、まことにいい終わりでありました」

こう聞かせられて、お政はひととおりならずよろこんだ。見る見る顔色がおだやかになつた。いつ何時どこで無残ななくなりようをすることやらと、つねづねそればかりを苦に病んでたのだから、まことにいい終わりようでありましたと告げられて非常によろこんだ。お政のそぶりはよく使いのふたりを動かした。

「それはほんとうのことでしょうね。それはほんとうでしょうね。わたしもそれを聞いて安心しました」

「人ひとりなくなつたのを、けつこうというはずはないが、まあ、ああして終わりますれば、ハイ、定命じやうみやうはいたしかたないとして、まずけつこうでござります、ハイ」

「まあ暗くらくなつたこと。かつてなことばかり申もうして、あかりもださずに、なんという無調法むてうぽうでしよう」

お政はきゆうにやとい女を呼よんで、灯とうみやう明めいを命めいじ、自分は茶ちやの用意よういにかかつた。しとしと雨は降ふる、雨落あまおちの音が、ぼちやりぼちやりと落おちはじめた。使しいの人らは、二里りの夜道を雨に降ふられては、と氣きづかうさまで、しきりに外そとをながめて、ささやいている。

老人はせきばらいする声こゑが奥おくに聞きこえるが、寝ねてしまつたらしく、ついででてこなかつた。源四郎はへつついまのまゑに腰こしをおろして馬うまのものをにているらしい。祖父そふにつき離はなされた松まつ女じよは祖母そぼにまつわつて祖母そぼにしかられ、しくしくべそをかいて母ははの腰こしにまつわるのである。祖母そぼはなにか氣きに入いらぬことでもあるか、平生へいぜいの手てまめ口くちまめにいず、夜道よみちを遠とほく帰かへるべき告つげ人びとにいつこうとんちやくせぬのである。やとい女むすめもさしずがなければ手出しのしようもない。ただうろついている。源四郎はもとより悪氣わるきのある男おとこではない。

祖母の態度たいどに不平ふへいがあるでもなく、お政の心しんちゆう中ちゆうを思いやる働きもない。

お政はただひとりで気をもんでるが、子どもには泣なきつかれる、どうしてよいかわからぬ。やつと茶をだしたけれど、ひととおり酒しゆしよく食くをさせねばならない告げ人を、まま母なる人がみようによそよそしているのもできぬ。使いの人も食事だけはやつて帰りたいと思うても、このありさまにごうをにやし、雨が降るのに夜おそくなつてはといいだして、いとまを告つげるのである。

「一口さしあげないで、どうしてお帰し申すことができましょう。ご遠方えんぽうのお帰りをまことに申しわけが……」

とお政は早や声をくもらして、四苦八苦しやくはくに気もみする。夫おつとにすこし客の相手あいてをしていくれと頼たのめば源四郎は「ウンウン」と返事へんじはしても、立ちそうにもせぬ。お政は泣く子をかげでしかりつけ、背せにおうて膳立ぜんだたてをするのである。おちついてやるならばなんでもないことながら、心中惑乱わくらんしているお政の手には、ことがすこしも運ばない。

老人はなぜ寝ねてしまったか、源四郎はどう思つてるのか。使いの人らは帰るにも帰れず、ぼんやりたばこを吸すうている。老人のせきする声と源四郎がときどきへつついに燃もやす火の音のほか、声立てる人もない。かくていまこの一家は陰いんあく悪あくな空気にとぎざれているの

である。

お政は長いあいだ苦くに思おもっていた狂母きやうぼが、きよう人なみに終わおつたと聞いて、一どは胸むねなでおろして安心あんしんしたものの、さすがに忘れわすれがたき母の死を感じては、心こころさびしくもあり悲かなしくもある。二十年あまりのあいだじやまにされ、やつかにされ、あらゆる醜しゆうじ状じやうを世間せけんにさらした生きがいなき不幸ふこうな母と思いつめると、ありし世の狂母きやうぼの惨さん状じやうやわが身みの過去かこの悲痛ひつうやが、いちいち記憶きおくから呼び起よこされるのである。

手に用をせねばならぬお政は、わきたぎつ涙なみだをぬぐうてもいられぬ。ひややかなまま母、思おもいやりのない夫、家の人びとのあまりにすぎなきしぶりを気づいては、お政は心しん中ちゆう惑乱わくらんしてほとんど昏倒こんとうせんばかりに悲かなしい。ただ雨の夜道を遠く帰らねばならない使つかいの人らに、氣を配くばるはりあいでは、お政はわずかに自分うしなを失うわすれているのである。

お政は夢ゆめの心地こころちに心こころばかりの酒しゆしよく食くをととのえてふたりを饗きやうした。つねはけつして人をそらさぬ人ながら、ただ「どうぞ」といったままほとんど座にたえないさまである。家か人じんのようすにいくばくか不快ふかいを抱いだいた使つかいの人らも、お政の苦衷くちゆうには同情どうじやうしたものが、こころよく飲いん食しよくして早たそうに立たち去さつた。

源四郎が、のろいからだとにぶい顔をだしたときには、使つかいの人らは庭まででてしまつ

た。

お政はずいぶん神経過敏に感情的な女であるけれど、またそうとうに意志の力を持つている。たいていのことは胸のうちに処理して外に圭角をあらわさない美質を持つている。今夜はじつにこみいった感情が、せまい女の胸ににえくり返ったけれど、ともかくもじつと堪忍して、狂母の死を告げにきてくれた人たちに、それほどに礼儀を失わなかった。

しかしながら、波瀾を表面に見せないだけ、お政が内心の苦痛は容易なわけのものではなかった。告げ人を帰したお政は、いささか気もおちついたもの、おちついた思慮が働く、さらに別種の波瀾が胸にわく。叫哭したくてたまらなかつたときに叫哭しえないで、叫哭すべき時期を経過したいまは、かなしい思いよりは、なさげなく腹立たしさにのぼせてしまった。

「あんまりだ」

こう一言叫んだお政は、客の飲み残した徳利を右手にとつて、ちやわんを左手に、二はい飲み三ばい飲み、なお四はいをついだ。お政の顔は皮膚がひきつって目がすわった。かたわらにいた松女は、子どもながら母のただならぬようすを見て、火がついたように泣き

だした。

「おじいさんとこへいくんだ。おじいさんとこへいくんだ」

お政はわが子の泣くのも知らぬさまに、四はいを飲みつくし、なお五はいをつごとする。源四郎も老人も松女のさけび泣きなにおどろいてでてきた。源四郎はお政の手から酒をうばって、

「こら、なにをするんだ」

「なにもしやしません。お酒をいただいでるんです」

「酒を飲むんだって、そんな乱暴らんぼうに飲んでどうする」

「あんまりです、あんまりです」

お政は泣き声にこうさけんでうつふしてしまった。松女は祖父そふにすがりついて、

「おかあさんをだましておくれよ、おかあさんをだましておくれよ」

老人は松女をすかして引き寄せながら、

「政やおまへの胸むねをおれはよく知っている。おまへの腹立はらだちにすこしも無理むりはないのだから、おまへの胸はおれがよく知しってるから、となりの家へでも行ってな、となりのおかあさんにおまへの胸をよく聞いてもらえよ。そうすりや気もおちついてくるだろう。なにも



かもすんでしまったことじゃないか。おまえがこれまで、よく堪忍かんにんしていてくれたことはおれがちやんと知しつてるのだから、なあ政まさ……えいかわかつたろう。源四郎げんしろう、おまえ、となりへつれていつて頼たのんでくれ」

老人ろうじんは、なにごとものみこんでいるから、お政の心しんちゆう中ちゆうを察さつし、涙なみだを浮うかべてむすめをさとするのである。

源四郎はわが妻つまながら、お政の悲嘆ひたんをどうすることもできなかつた。

「おとうさんもああいうのだから、黙だまつてくれ。おまえの心はおれだつて知つてるよ。さあ、おとうさんがいうのだから、となりの家へすこしいつておれよ。おれがいつしよにいから、えい、お政……」

お政は源四郎のことばには答えもせず、わずかに頭を起こし、

「おとうさん、もう心配しないでください。となりへいかんでもようございます。わたし、しばらく休ませてもらえばようございます」

「そうか、そんならおまえのすきにしてくれや。それじゃ松まつや、おかあさんはね、すこし休やすむちから、さあ甘あま甘あまにしようよ」

老人はそのままお台屋だいやへはいる。源四郎は妻つまをうながして納戸なんどへ送りやつた。

まま母ははじめから口もださず手もださず、きわめて冷然たるものであった。老人は老妻の冷淡なるそぶりにつき、二言三言なじるような小言をいうたに對し、「わたしやなにもかまいやしません。お政がひとりで腹をたつてるのは、わたしにもしようがありませんもの」

まま母のもののいいは、齒にももののはさまつてるような心持ちに聞こえるけれど、やさしい老人はそのうえ追及もしなかつた。源四郎はもちろん妻のしぶりに同情しているが、さりとてまま母の冷淡に憤慨するでもない。黙つて酒を飲み、ものを食つてゐる。雨はいよいよ降りが強くなつてきたらしい。

翌日は意外な好天气で、シギが朝早くから例のせんだんの木に鳴いている。

二十年まえに離別した人でこの家の人ではないけれど、現在お政の母である以上は、祭りは遠慮したほうがよからうと老人のさしずで、忌中の札を門にはつた。ものざといお政は早くも昨夜のことは自分の胸ひとつにおさめてしまえばなにごともなくすむことと悟つて、朝起きる早そう色をやわらげて、両親にあいさつし昨夜の無調法をわび、そのまま母の喪におもむいた。そうして思うさまにその狂母を泣いた。泣いて泣きぬいた。

親戚しんせきのものは、みな気違あやまちいが死んでくれてやれよかつたといってるなかで、お政がひとり泣いておった。お政が心しん底そこをしんに解かした人は、お政の父ひとりくらいであつたらうけれど、それでもだれいうとなく、お政さんはかきこい女めだという評ひょう判ばんが立つた。



# 青空文庫情報

底本：「野菊の墓」ジュニア版日本文学名作選、偕成社

1964（昭和39）年10月1刷

1984（昭和59）年10月4刷

初出：「ホト、ギス 第十二卷第三號」

1908（明治41）年12月1日

※表題は底本では、「告《つ》げ人《びと》」となっています。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2016年7月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 告げ人

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>